イスラエル・アメリカ留学記

加藤哲平（ヒブル・ユニオン・カレッジ博士課程）
（2013年9月　後期課程退学）

私は2012年８月から2013年７月までの一年間をエルサレム・ヘブライ大学ロスバーグ国際校の客員研究員として過ごし、同年8月からは米国オハイオ州シンシナティのヒブル・ユニオン・カレッジに博士課程学生として在籍しています。

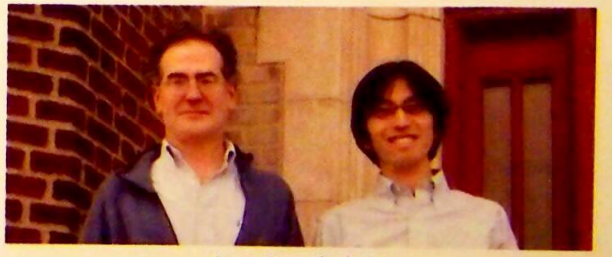
イスラエルには以前にもヘブライ語集中講座（ウルパン）を受講するために数ヶ月滞在したことはありましたが、やはり初めての長期留学は不安で、特に私の場合は渡航直前に結婚したので同行する妻の心配もしていました。しかしそんな夫を尻目に、イスラエル行きの機中で初めてアレフベートを学んだ妻は、帰る頃にはたくさんの友人たちとヘブライ語で別れを惜しむほどにこの地に適応するのでした。むしろ問題は私の方で、滞在中にウルパンの全課程を修了するために背伸びしたクラスに入ってしまったのが運の尽き。精神的に追い詰められたスタートとなりました。

それでも秋になると少し余裕が出てきたので、大学の授業にも出てみました。そこで選んだのが、ヘブライ語聖書の本文批評の専門家であるイマニュエル・トーヴ（Emanuel Tov）先生のゼミでした。トーヴ先生は数年前に大学を退官しましたが、現在も七十人訳講読ゼミを続けていたのです。おそるおそる連絡してみると、同志社の客員教授として京都に滞在したこともあるトーヴ先生は、同志社から学生が来て嬉しいと言って快く迎え入れてくれました。ヘブライ語聖書のギリシア語訳である七十人訳を現代ヘブライ語に訳し戻していく作業は、さまざまな発見に満ちた体験でした。トーヴ先生にギリシア語の発音を褒められたことと、ちょうど滞在中に出版されたヒエロニュムスに関する拙論（*Vigiliae Christianae* 67［2013］：289-315）に好意的なコメントをもらえたことはよい思い出です。

その後私はヘブライ語の最終試験に合格し、修了証明のプトール資格を取得したのですが、これはかねてより準備していたヒブル・ユニオン・カレッジ（HUC）への入学審査にもよい影響を与えたようで、有難いことに給付金付きでの入学が許されました。実は私のイスラエル留学は、この米国留学を先に見据えたものでした。米国の改革派ユダヤ教徒の大学であるHUCで、日本人の私がラビの卵たちと机を並べるためには、少なくともイスラエルでヘブライ語を修めてくる必要があったのです。

そこまでしてなぜHUCに入りたかったかというと、ここで私の憧れの人であるアダム・カメサル（Adam Kamesar）先生が教鞭を執っているからです。カメサル先生はフィロンやヒエロニュムスといったギリシア・ラテン世界の聖書文学の専門家ですが、それだけに留まらず、それをユダヤ古典文学との関係の中で真に論じることのできる稀有な学者です。近代ユダヤ学は西洋古典学（文献学）との弁証法的な緊張関係の中で練磨されてきた側面がありますが、カメサル先生はまさにその系譜を引き継ぎ、発展させた学者といえるでしょう。私は修士時代に神学館の院生研究室に籠って貪るように彼の著作を読みました。そしてそこから得たアイデアをもとに、いわばカメサル先生に手紙でも書くような気持ちで前述の論文を仕上げたのです。そのような先生のもとで学び、また公私に亘る関係を築くことができたのは、本当に幸運なことでした。今学期の授業ではフィロンの著作を読んでいますが、カメサル先生の解説によって行間から立ち上がってくる古代思想の影響関係の妙には、毎回驚くばかりです。

留学の最大の喜びとは、畢竟、自分の枠外にある知識や発想を与えてくれるものとの出会いではないでしょうか。「トーラーを学べる場所に遍参していきなさい。……己の理解を当てにしてはならない」（ミシュナー・アボット4:14）。



カメサル先生と